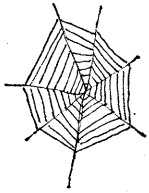
浅山英一先生の「児童園芸学」の講義をきいて



皆川　美恵子

去年の秋、千葉大学の浅山英一先生による園芸学の集中講義が、お茶の水女子大学児童学科で行なわれました。私は「児童園芸学」と題された講義でどのようなことをやるのか興味をもちました。また以前から「園芸植物図譜」という眺めているだけで楽しくなる、美しい本を通じて、浅山先生のファンでしたので、この時とばかりに聴講をさせていただきました。

先生の講義は、独特のユーモアと、黒板にあらわれては消える、これまた独特の絵とであふれていました。そのような講義内容をどれ程伝えられるか、心もとないのですが、その一部を紹介しましょう。

いちょう

いちょうの葉をよく見ると、二種類あるのに気づかれると思います。一つは、真中に切れ目のある葉、もう一つは、切れ目の

ない葉です。これは雄のいちょうの葉と雌のいちょうの葉のちがいです。どちらが雄で、どちらが雌か、子どもにもすぐわかり、一度覚えたら忘れない覚え方を、先生が絵に描いて教えて下さいました。

スカートのような形の葉が雌で、ズボンのような割れた形の葉が雄の葉と子どもに教えればよいのです。スカートやズボンとは、何と洒落たアイデアではないでしょうか。（図1）

小学生の子どもには、いちょうの葉はデザインの勉強にもなります。葉の形をいろいろ組み合わせたりして、おもしろいものが生まれそうです。（図2）

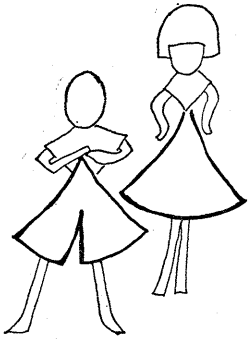


図 1

いちょうのことを漢字では、「公孫樹」とか「銀杏」と書きます。しかし、このような漢字でどうしてそう読めるのか、疑問をもったことがあるのではないでしょうか。中国ではいちょうのことを、この他に「鴨脚」とも言ったそうです。葉が鴨の水かきに似ている樹という意味です。日本名のいちょうは、この鴨脚の宋音ヤーチャオがイーチャオ→イチョウと訛ったとされているそうです。ですから、公孫樹、銀杏からはイチョウの音は出てこないわけです。しかし、イチョウで代表させて、みなイチョウと呼ぶようになったというわけです。

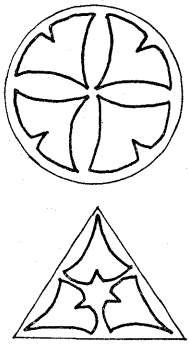


図 2

公孫樹とは、公（父親）が植えれば、孫の代に実がなる樹という意味であり、銀杏とは、その実は銀の杏のようだという意味です。

悪魔の爪

北米原産の「つのごま」という植物があります。春に黄色い花が咲き、実ができるのですが、その実が全く変わっているのです。まっ黒い十二、三センチ位の大きさで、二本の硬い爪がついているのです。ふくらんだ部分には棘（とげ）がたくさんあり、二本の長く大きな爪は、骨のような質感がします。（図3）ダーウィンは、この爪から、

つのごまを「悪魔の爪」と名づけました。まさにピッタリの名前だと思います。

この硬い爪は、いろいろなものがひっかけられます。先生は学生のバッグをこの爪で持ち上げたり、もっと重いものも大丈夫と椅子まで持ち上げてしまいました。「三キロ七五〇グラムまで持ち上げられるんです」と茶目っ気たっぷりです。さすが科学者で、どうやら実験ずみのようです。

この「つのごま」の上に、ほおずきの頭をつけ、つのごまを胴体と尾に見たて、銀ネムの果実の莢で羽のような手をつけたツバメのような怪鳥、それに糸をつけグルグル、グルグル先生はまわしました。空中を飛び回る黒いもの、長い爪のような尾を持つ無気味なもの、それはまるで、魔法の小鬼のようです。この空飛ぶ小鬼のおもちゃを見て、ほしくならない人はいないと思います。先生は二本の爪を広げて実の中から種子を出して、私たちに下さいました。宝物のようなその種子をまいて、育てて、花を咲かせ、実をならして、来年こそはぜひその実で空飛ぶ魔法の小鬼のおもちゃを創りたいと思います。私たちでさえそう思うのです。子どもならなおさらでしょう。

そして種子をまくことから園芸学の話になっていきます。なぜなら、いつまけばよいのか、どう世話をすればよいのかという知識がなければ、芽も出ないし、花も咲かないのです。

つのごまの種子を春にまいても芽は出ません。北米の寒い所に育つこの植物は、冬が過ぎたという証拠があってはじめて、春に芽を出すのです。冬の証拠、それは摂氏零度で三十日から五十日間とじこめられることです。この氷に閉じ込められる状態にあって、種子に変化が起こりはじめるのです。

ですから、秋に鉢に種子をまき、雨や霜や雪にあわせなくてはいけないのです。さあ、私たちのつのごまに芽が出るでしょうか。「冬ようんと寒くなれ」と祈ることにします。

図 4

草花あそび

いちょうでもって、緑色または黄色のスカートやズボンをはいた子どもをつくることができます。たくさんの子どもたちを整列させたり、輪をつくってみるのも楽しいにちがいありません。アイデアでもって、いろいろな遊び方が生まれてきそうです。

つのごまも、マントを着せて、もっと恐ろしい悪魔をつくることもできれば、爪を利用して帽子かけをつくることもできます。自然の形、色などを生かして、自分の想像力でいくらでも独自なおもちゃが創れそうです。

既製のおもちゃは細かなところまで、いたれりつくせりに完成されています。そのため子どもが自分で空想を働かせる余地がなくなっています。子どもには、葉っぱや実や花などの方がどれだけよいおもちゃになることでしょう。自分の空想で完成するおもちゃ、そのいくつかを浅山先生は紹介して下さいました。

図 3

風船かずらには、細長い果柄に果実が、風船のように垂れ下がります。この風船の中の種子がおもしろいのです。種子の皮は背面がまっ黒で、腹面にハート形の白色部があるのです。おさるの顔にもってこいなのです。白色部に顔を描き、モールで手足と胴をつくると、おさるができ上がります。何十とおさるを作ったらさぞ楽しいことになるでしょう。

よく街路樹として植えられているゆりの木は、葉が印ばんてんの形に似ています。そこからはんてんぼくとも呼ばれますが、この葉で印ばんてんを着た人形をつくることができます。いろいろな印ばんてんを着た職人が勢ぞろいしそうです。(図4)

金魚草は、花の形が金魚に似ているところから名づけられました。しかし形ばかりでなく、この花は金魚のように口がパクパクするのです。花の花筒部を指で押えると、パクリと口をあけたように開きます。「金魚パクパク」と子どもに教えれば、子どもはすぐ花の名前を覚えるでしょう。そして植物に親しみを感じ、もっと多くの植物への興味へと広がっていきます。

植物の名前

植物の名前の中で一番短い名前、そして一番長い名前は何か御存知でしょうか。もちろん外国名、学名ではなく、日本名での話です。こういうことは、植物に関する該博な知識をおもちの浅山先生からにしか、聞けないお話でした。

一番短い名前は、一字の名で「い(蘭)」と「う(卯)」だそうです。「い」は畳表にするイグサのことで、「う」は卯月に咲く卯の花のことです。

それでは一番長い名前は何かというと、

「リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ（竜宮の乙姫の元結の切り外し）」という二十字の名前だそうです。これは、海草のアマモのことで、アマモが元結の切れ端に似ていることからつけられたそうです。このアマモは「待つ人を松帆の浦の夕凪に焼くや藻塩のみもこがれつつ」と百人一首にもある、定家の歌に出てくる藻塩の藻のことだそうです。

さて授業中、皆がどれだけ植物の名前を知っているか、名前をあげさせられました。しかしただ漠然と名前をあげていくのではなく、鳥の名のつく植物、虫の名のつく植物などとあげていくのです。皆さんもやってみられたらいかがでしょうか。

出た名前をまとめると次のようになりました。

○鳥の名

さぎそう、からすうり、からすのえんどう、すずめのえんどう、うずらまめ、つばめあさがお、うぐいすかぐら、くじゃくひば、ほととぎす、はとむぎ、ちどりそう、つばめずいせん、ときそう、はくちょうげ

○虫の名

まつむしそう、すずむしそう、くわがたそう、ほたるぶくろ、ほたるかずら、こちょうそう、おけら

○動物の名

いぬのふぐり、いぬりゅう、いぬつげ、ねこじゃらし、ねこのひげ、ねこやなぎ、ねずみもち、ねずみゆり、さるすべり、うさぎのお、とらのお、ライオンそう、キリンそう、フォックス・フェイス

○自然現象の名

かすみそう、あさぎりそう、ゆうぎりそう、うすゆきそう、さみだれぎきょう、しののめぎく、かぜくさ、スノー・ドロップ

どうです、実物を知らない植物でも、名前からいろいろと想像してみたくなりませんか。

スィトピー

スィトピーは名前のように愛らしく、春のよろこばしい訪れを告げる花として、人々から親しまれ、愛されてきています。マメ科の一年草のこの花は、原産地がシシリー島です。シシリーはアルカリ性の石灰土壌です。それに対し日本は、火山の溶岩が水にとけ、酸性土壌になっています。酸性土壌のところにスィトピーの種子をまいても、種子は生育しません。スィトピーの種子が生育するには、なつかしい故郷と同じアルカリ土壌でなければならないのです。そこで石灰を少し土にまぜ、そして種子をまかなくてはなりません。このようにスィトピーの種子には、まるで自分の種族が生

まれ育った母なる大地への記憶があるようです。

またスィトピーの種子は、朝顔の種子などといっしょに、硬種（かただね）と呼ばれる種子です。硬種とは、完熟した種子にニス状の物質がある種子です。そのような種子をそのままいても、水を通さないため発芽しません。種皮が風化した数年後にやっと発芽するのです。

そこでスィトピーをまく時には、一晩水につけてみます。やや未熟な種子は吸水してふやけますから、それはそのままきます。しかし吸水しない硬種は、小刀でちょっと皮をけずってからまくのです。

どうして硬種などというものがあるのかというと、種子がいっせいにみんな発芽した場合、天災にあったり、動物に食べつくされたり、人や動物に踏み荒らされて、その種が亡んでしまう危険があるからです。そのような危険を避けるために、ゆっくり時間をかけて芽を出す硬種が、種族保存としてあるのです。きゃしゃで頼りなげな、かわいいスィトピーですが、その種子は、今述べたような硬種という土の中で眠り続ける、不屈な生命力の強さを隠し持っているのです。

金の松葉

十一月の好天に恵まれた日、先生といっしょに新宿御苑で行なわれた菊花展へ行きました。古式にのっとって紫幕に朱房をかけ、葦簾（よしず）や障子で仕立てられた展示小屋の中に、整然と並ぶ菊の美しさは、全くすばらしいの一語につきました。先生の説明を聞きながら、展示小屋を回っていた時です。先生は庭の松の木を指さして、「あそこの枯れた松葉が、皆には金色に見えますか。人によっては金色に見えるんですよ」と言われました。そう言われてよく見ると、金茶色に見えてきました。枯れて、緑色の松葉の下にひっかかった茶色の松葉でも、金色に愛（め）でて楽しめるのです。日本画などで、松に金粉を用いて描かれている意味がこれでわかりました。

このように先生のお話は、いつも植物への思いがけない視線を導くものでした。

子どもの植物への興味を育てるのが児童園芸学です。それにはまず大人が、そして特に母親が植物に興味をもち、植物を育てているのが望ましい状態かもしれません。しかし、美しい枯れ葉を拾って大事そうにしている子ども、松ぼっくりやどんぐりを宝物のように拾っている子どもを見ると、子どもはもう、大人以上に植物への思いがけない視線をもっているのかもしれないと思われます。そういえば、浅山先生は、とても子どもっぽい面をもっていらっしゃいました。

（了）